

終章　さらなる展開にむけて

われわれはいま・この拡がりのなかに過去あるいは未来を析出し、またそれに対峙する自己を自己として自覚してゆく。析出された過去および未来、また自覚された自己はそれ自体「ある」ものではなく、いま・この拡がりのなかでのそのつど生成されるものであり、それは一つの通過点である。われわれはその通過点を時にはモノとして、時にはコトとして捉えている。実証的研究は自己分離の立場から生きるものを研究対象とし、近代の知を確立してきたが、臨床的研究は自己非分離の立場から常に自らの生きることの世界を問題にし、臨床の知を体系化してきたのである。昨今、近代の知に対する反省からであろう、臨床の知に対する関心は高いが、双方の知は対峙するものではなく、互いに補充しあうものである。

本書は、生きるものと生きることが織りなす世界を「なる」視点から明らかにしようとしたものである。われわれは世界と絶えずかかわるなかで自己と世界の不二体を構成し、分化してゆく。不二体の構成と分化は固有の場の支援と制約に支えられており、その支援と制約は獲得された身体、生ける身体の出発である。いま、生ける身体を構築しているかぎり、人びとの行為は状況に埋め込まれ、行為主体と課題とのあいだには一切の乖離はない。人は自由に振る舞い、しかもその行為は状況に適合したものである。それは即興的な行為であり、その行為を支える知は透明であり、また頭のなかに閉じ込められたものではない。その知は人と状況とのあいだにあるという意味で、個人的知識を超えたものである。あいだとしての知識が、たとえば状況的認知論のいう知識の特性である。それは

動的な関係にあり、したがってその知識は「ある」ものではなく、かかわりのなかでそのつど生成される、つまり「なる」ものとしてある。「なる」知識は固有の場で展開するものであり、行為主体とその場は不可分のものとしてある。

このような状況的な知識の考えからは、従来とは違った新たな知識観に基づいた認知のあり方、学びの可能性が浮かび上がる。従来の教育あるいは学習では、教える者あるいは学ぶ者はそれ自体としてあり、必ずしも関係として捉えられていたわけではない。そのため、教える者は教育あるいは学習に望ましい状況を設定し、学習の段階を体系的に提示し、それに従って子どもたちを教える、あるいは育てるという考えが根強くあった。教えるべきものがそれ自体あり、それを子どもたちに注入するという注入主義の立場である。一方、新しい知識観からすれば、望ましい状況がまえもつてあるわけでもなければ、また学ぶべき知識がそれ自体あるわけでもない。人びとはかかわりのなかで、たとえば実践共同体のなかで自らが状況を構成する主体となるなかで、必要なことを必要な時に学んでゆく。そのため、その学びの方法も決して一様ではない。

とすると、かかわりのなかで人びとが何を、どのように取り入れ、また自らの知をどのように構築しているのか、一連の過程を、その内実を「なる」視点から捉えてゆく必要がある。その際、教える者のすべきことは必ずしも教えることではなく、人びとが学びの場を実践共同体として構築してゆくことである。学びの望ましい方向はその延長上におのずと立ち現れてくるように思われる。それぞれの人の内におのずと立ち現れる望ましさがある以上、教える者がまえもつて望ましさの基準を規定することはできない。学びに及ぼす望ましい社会あるいは文化のあり方を問題にすることもできるが、ここでは望ましさそれ自体があると考えるのではなく、それはいま・この拡がりのなかに立ち現れるものとして、つまり「なる」過程の通過点の一つとして捉えられる。

われわれは社会の変化、変動と子どもの成育、教育あるいは生活を互いに分かちがたいものとして捉えてゆく必要がある。そのため、固有の文化、社会に生きる子どもと切り離された変化ではなく、子どもの固有の場あるいは生活世界としての変化、変動を取り上げなければならぬ。子どもの固有の場が家族、地域の人びとあるいは人びとの抱く価値観、人生観と深くかかわっていることを考えると、子どもの育ちはその反映であり、表出であるといえる。子どもは小さな大人でもなければ、大人は大きな子どもでもない。双方とも絶えず生成、発展してゆく存在であり、いま・この姿は一つの通過点でしかない。それはいま・この状況のなかで立ち現れた一つの姿である。

本書の目的は、その姿のなかに固有の場の影響をみることであり、また人びとの行為を行為者自らの視点から記述することである。それは、たとえば固有の場における変化、変動がいかん人びとに影響を及ぼすかをみることであり、また人びとが変化、変動をどのように捉え、かつ受け入れているかをみることもある。それは固有の場を「ある」ものとして捉えるのではなく、あくまでも自己とのかかわりのなかでそのつど「なる」ものとして捉えてゆくこともある。そのためには「なる」過程に身を委ねて、そのものを直接身体で感じとってゆかなければならない。

それが可能なのは行為者自身である。現に、行為者は自証した世界を記述することができる。それだけでなく、たとえ研究者であっても、彼が行為者と実践共同体を共有しているかぎり、行為者の内的世界を行為者の視点から記述することも不可能ではない。それが、たとえば関与（しながらの）観察である。あるいはまた、研究者が行為者として実践共同体に身を委ね、行為者と場を共有して共同想起を繰り返すなかに、「なる」過程を内なる視点から記述することもできるはずである。この記述の手法が本書で提唱した「想起的構成と分化」である。

しかし、現実には実践共同体の構築、維持そのものが難しく、そのため身を委ねることも、また内的な過程を記述することも難しい。それだけでなく、固有の場のもつ影響、具体的には近代社会の枠組み、制度による文化圧があまりにも強力であり、われわれはそれに呑み込まれ、文化圧そのものが独自に存在するかのような錯覚を覚える。そこでは、たとえば個体の意志は抹殺され、人びとは受動的にならざるをえない。少なくとも、その可能性は否定しえない。この考えのもとでは、もはや実践共同体の成立そのものが難しくなる。やがて、人びとは枠組み、制度がそれ自体存在するかのようになり、それを自己と切り離れた「ある」視点から捉えようとする。

しかし、文化的、社会的構造がその歴史的發展において個人の経験様式あるいは思考様式にいかにか大きな規制力をもつとも、文化的、社会的構造が発生する時点においては常に個々の自己とそれらを生み出す世界との出会い方、つまり個々の自己が自己をその世界のなかに見出す見出し方が基礎にある。しかも、自己をその世界のなかに見出す以前の自己を考える時、その自己は白紙のそれではない。その自己もまたかかわりの所産であり、通過点の一つである。これとまったくおなじことはいま・ここでの自己と世界との出会い、あるいは自己の見出し方についてもいえる。社会構造や文化構造が刻々と発生し続けているものである以上、その刻々において自己と世界との出会いはあり、われわれはそこに自己を、世界を見出している(第8章参照)。この意味で、いかに社会構造あるいは文化構造が強力であるとしても、それはわれわれが日々作り上げているものである。カースト制度が何千年もまえにできたものであるとしても、それはいまなお日々作られつつある。

とすると、社会構造あるいは文化構造とわれわれの出会いの形は無限にまで拡大し、まえもつて予測あるいは制約することなどできないことになる。出会いはそのつど立ち現れるものあり、それが通過点である。そして、このこととわれわれが身体的存在であることは深く関係している。身体はいま・ここという固有の場を占めるがゆえ

に、その固有の場に厳しく制約される。しかし、身体的存在であるわれわれは固有の場でのかわりを通して、その制約を能動的に克服してゆく。

生ける身体は獲得されたものであり、われわれはその獲得能力それ自体を生得的に受け継いでいる。しかも、獲得能力そのものが固有の場に埋め込まれていることから、その克服あるいは獲得の形態はいかようにも展開する。たとえば、子どもが何に関心を示すか、それには文化差が表出する。それは、子どもの嗜好性、思考形態が固有の場に埋め込まれているからである。嗜好性、思考形態はそれ自体あるものではなく、固有の文化のなかで獲得されたものである。たとえば、子どもは面白いから夢中になるが、その面白さは獲得されたものである。それは、まさに制限された時間の幅のなかでの仮説的実在論の展開であり、自己の表出としての世界であり、世界の内面化としての自己の内なる世界である。

社会的構造あるいは文化的構造と自己がどのように出会い、そこにどのような自己を見出してゆくのか、その見出し方は選択の問題でもある。選択は「ある」ものを選ぶことではなく、「なる」ものとしての、生成としての選択である。それは選択対象の属性によって選択するものではなく、個々人、社会、文化のもつテイスト、価値観の表出である。しかも、その表出は他者とのかわりのなかに埋め込まれている。現に、人生の意味はすべて他者（世界）との関係のなかに立ち現れるが、昨今の社会構造の急激な変化、変動は確実に関係を希薄なものにしていく。それを取り戻すためには双方向的な関係、なま身の感覚が必要になる。

考えてみれば、社会はいつの時代であっても変化、変動のなかにあるが、二〇世紀末から二一世紀にかけてのそれは従来のそれらと根本的に違うものであろうか。変化、変動が自己と世界との出会いのなかに立ち現れたものである以上、その変化とか変動は、もう一方の人びとの変化、変動と不可分となる。そのような動的な関係のなかに

あつて、われわれはもはや双方向的な関係、生の感覚を取り戻しえないのであろうか。われわれは、たとえばマクロレベルで環境問題、人口問題に直面しているが、必ずしもそれらを自らとの関係で捉えられず、そのため実感として捉えることが難しい。また、ミクロレベルでの人びとの関係の希薄化、断絶はもはや修復不可能であるかのようには思われる。いずれのレベルにおいても、自己と世界の動的なかわりがあるが、われわれはそれを身体レベルで捉えられない。二一世紀では、確実に現実感を伴った世界が後退し、われわれは人工的な世界での生活を余儀なくされるであろう。としても、われわれはそこに従来とは違った現実感を見出し、その問題を解決してゆくのではないだろうか。現に、人類の歴史を振り返れば、人類は直面した多くの困難を確実に克服してきている。

しかし、このような認識そのものを根底から問い直すことが昨今求められているように思われる。それは進歩の思想を、さらにはその所産である近代の知そのものを問い直すことでもある。確かに、進歩の思想は直面した問題をそれなりに解決してきたが、いまそれがある時間の幅で捉えれば、その解決は点のごときいま・ここのそれではない。むしろ、根本的な解決を先送りしてきただけではないかとさえ思われる。

現に、近代自然科学の発展と成果は、逆に多くの問題を引き起こしている。昨今の地球規模でのさまざまな問題、あるいは近代社会の抱える閉塞感はどうであらうか。進歩の思想そのものがその根底において成立しえないのではないかとさえ思われる。われわれはいま・ここの拡がりのなかに生きているが、その拡がりは直線的なものではなく、むしろ循環的なものである可能性もある。概念的には、直線と循環とは相容れないが、これらは必ずしも矛盾するものではない。いま、ある時間的な幅のなかで循環的な拡がりのある部分を取り出せば、それが直線的に見えるだけではないか、とも思われる。輪廻の思想は、本来進歩の思想とは比較にならないほど長い時間の幅のなかで体系化されたものである。

筆者は必ずしも輪廻の思想の信奉者ではない。この思想は現世での諦観をもたらし、たとえばカースト制度を維持する思想的枠組みとして機能していることは否定しえない。輪廻の思想は本来、いま・この自己のあり方を充実させるためのものであったはずである。インドの哲人はいまある自己よりもより高い自己を希求し、自己を絶えず構築してきたのである。その手立てが修行であり、その過程が熟達化である。たとえば、それを通して熟練のアイデンティティを確立し、またものを見る眼を身につけた熟達者は、たとえば初心者のかんづかぬことのできない別の世界を見てゆく。彼らは初心者とは違った認識の枠組みを身につけている。とすると、人びとの見る眼を、さらには「ひと」の働きを涵養しさえすれば、従来とは違った新しい世界がそこに立ち現れてくる可能性は充分にありうる。

いま、自己と世界の関係を見るに、二〇世紀の近代の知は自己に対峙する世界をそれ自体あるものとして捉え、だからこそその変革に、またその操作に重点を置いてきたのである。そして、このことが逆にさまざまな問題を引き起こしてきたように思われる。環境問題にしても、ある意味では変革あるいは操作の逆襲であろう。しかし、二一世紀に生きるわれわれはかかわりの主体である自己の変革に重点を移すべきではないかと思われる。われわれの認識、さらには生存が自己と世界のかかわりとしてある以上、いずれか一方のみでは生きてゆくことはできない。ただ、より高い自己を希求し、修行を介して自己を豊かに涵養することによって、たとえば「ひと」としての働きを高めることで、もう一方の世界をそれほど変革、操作することなしに、以前にも増してより充実した関係を手にしうるように思われる。

筆者は、自己を豊かに涵養するために認知心理学、認知科学を専攻してきたが、学問としての心理学と修行とを結びつけることは難しい。筆者の力量のなさゆえであろうが、心理学だけでなく学問それ自体が自らの生きること

とは無関係に成立していることも、その難しさの原因である。筆者は、その難しさを補う意味でインドに身を委ね、また仏像を彫っている。修行にはなんらかの媒体が必要であることはいままでもないが、それが特殊なものでないならばならないということはない。私の場合のそれはたまたまインドであり、仏像彫刻であるだけのことである。人それぞれの身にあつた媒体があるはずである。いかにそれを見出し、さらなる自己を希求してゆくか、これが問題の解決のすべてであろう。臨床認知科学の基本的な姿勢はその解決に向けられている。